

列王記上 19 章 15～16、19～21 節

ガラテヤの信徒への手紙第 5 章 1、13～25 節

ルカによる福音書 第 9 章 51～62 節

先週末ぐらいから、急に真夏日のように気温が上がってきました。みなさまどうぞ、くれぐれもご無理をなさらず、体調にお気を付けてください。

さて、本日の三つの聖書個所に、共通したテーマを見出すとするならば、それは「召命」だと思います。「召命」とは、単純に言えば、主なる神様の人間への呼びかけに他ならないのですが、「召命」とあえて表現する場合の呼びかけは、人間に使命を与えるためです。それゆえに『聖書』には、いろいろな「召命」が描かれています。王・メシアへの召命、預言者の召命、イエス様による弟子・使徒の召命などです。また、教会においても、キリスト者への召命、聖職・教役者への召命、教会の様々な働きへの招きなどがあります。人間は、時間と空間を超えて、それぞれに使命を与える呼びかけを受ける存在なのです。

旧約日課、「列王記上」の物語には、三つの召命の出来事が描かれています。それは、預言者エリヤを通して実行されるのですが、エリヤは、北イスラエル王国にバアル宗教の礼拝を導入したアハブ王と対決した預言者でした。アハブ王の統治の時代、北イスラエルは国家的には繁栄したのですが、アハブ王自体は、イスラエルの王でありながら、イスラエルの神様に背いた王でした。そして、預言者エリヤは、その王と国家を相手にして奮闘し、心折れかかっていました。主なる神様はそのような彼に、三つの召命を実行しなさいと命じたのでした。また、その召命は、「油を注ぐ」という行為をもって行うように、指示されています。「油を注ぐ」こと、「油注がれたもの」を生み出すわけですから、誰かを「メシア」にするということです。イエス・キリストのキリストという言葉の起源ですが、ここでは意味が異なっています。

最初の、召命は、「**行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ**」(列王上 19 : 15) という部分です。アラムとは、今でいうシリア地方です。このときはイスラエルと敵対する地域でした。その国のハザエルという軍人にクーデターを起こさせて王としなさいというのです。イスラエルの主なる神様による、外国の王に対する召命です。

このハザエルは、アラムの王となったのち、北イスラエルと南ユダ王国にとって、脅威となります。つまり主なる神様は、自分の民の王国、イスラエルにとって脅威となるような国の人物を召命するように、エリヤに命じたのです。これは、イスラエルに対する罰のような召命です。このことから、主なる神様の召命という事柄が、決して自分の民を守ることだけではない、ということが分かります。

次は、「ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ」（列王上 19：16a）とあります。これはイスラエルの王への召命です。そして、このイエフは、北イスラエル王国で、アハブ王とその妻イゼベルがもたらした異教的な要素を排除することに努めます。しかし、アラムなど近隣と外交を深めて、国家を栄えさせるという点では、あまり活躍しませんでした。イエフの召命は、国家間の外交や軍事的同盟によらない、イスラエルの歩むべき道を示すための召命であったといえるのですが、一般的な世界史的観点から評価すると、北イスラエル王国の弱体化をもたらしたといえます。

最後が、「またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。」（列王上 19：16b）とある通り、エリシャの預言者への召命です。エリヤとエリシャは、同僚であると同時に、師弟関係でもあります。エリヤがエリシャに「自分の外套を投げかけて」招くというのは、なんとも格好良い弟子の召命の場面です。そのままエリシャが従っていけば、より良いのですが、「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」（列王上 19：20）と父母と別れをします。また「エリシャはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従い、彼に仕えた。」（列王上 19：20）とあります。預言者、ことにエリヤの後継者となるのは、命がけの大変な勤めです。そのためでしょうか、彼はしっかりと人々と別れをしてから従うのでした。

これら3つの召命は、イスラエルの敵、イスラエルの王、そしてイスラエルの預言者に対する召命でした。これらの召命の物語からわかることは、主なる神様が、イスラエルを超えて、また人間の思いを超えて、しかし、人間の働きを用いて、世界に主なる神様の正義と平和のあり方を示すということです。

さて、今日の福音書「ルカによる福音書」の物語は、召命に関する個所といえますが、いわゆる弟子の召命の物語とは異なっています、イエス様に従うとはどういう意味かを伝えている物語です。言い換えれば、弟子たちやイエスの周囲にいた人々が、イエス様に従うことをどう勘違いしていたのかがわかる箇所です。

最初に「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」とあります。9章は、ルカ福音書の三分の一ぐらいですが、すでに受難の予告がされており、これからイエス様の歩む道が、十字架の死に至る道であることが示されています。その意味では、すでに緊張感のある場面であるといえます。

イエス様と弟子たちは、ガリラヤからエルサレムに向かう途中、サマリヤを通ります。しかし、その地の人々は、「村人はイエスを歓迎しなかった」とある通り、イエス様たちを快く思わなかったようです。直訳すれば、「受け入れなかった」なのですが、サマリヤ人とユダヤ人とは仲が悪かったことが、ここに表れています。しかし、注目すべきは、弟子たちの言葉です。

「弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、『主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか』と言った。イエスは振り向いて二人を戒められた。」（ルカ 9：54）。「焼き滅す」とありますが、「殲滅」という表現でも構いません。自分たちを受け入れないものは、天からの火で「殲滅」する。今日、教会にかかわる人で、このような発言をしたら、大問題になると思います。また、イエス様の時代は、そんな出来事は、天変地異的な事柄か、神話的な事柄に思われたかもしれませんが、現代はそれを実際に行える兵器があります。その意味では、現代のわたしたちのほうが、この弟子たちの言葉に恐怖を感じます。弟子たちは、何のために自分たちがイエス様から召命を受けたのか、全く勘違いしていた証といえます。あるいは、弟子たちの間違った正義感が明らかになったともいえます。「イエスは振り向いて二人を戒められた。」（ルカ 9：55）という答えがありますので、一安心ですが、イエス様による召命を受けても、そういう恐ろしい発想が起こりうることを、今も警告しているといえます。

次は、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」（ルカ 9：57）と言う、自分から召命を申し出るような人が出てきます。それに対して、イエス様は、「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」（ルカ 9：58）と語ります。この言葉は、イエス様の嘆きともとれます。なぜイエス様が、自分に従う申し出に対して、嘆きのような言葉を語るのか、ここは推測するしかないのですが、イエス様は、その人の思い違いを分かっていたのでしょう。先に述べました通り、9章22節以下で、イエス様はいわゆる受難予告をしています。主なる神様のイエス様への召命とは、十字架上で殺されることです。申し出た人がそれを知っていたのかどうか分かりませんが、そのような召命の道を、自分から「どこへでも従います」、自分も実行できると明言する人に対して、イエス様は嘆かざるを得なかったのだと思います。

次は、イエス様の方が、従いなさいと声をかけた人です。ここも細かい状況はわかりませんが、最初の人には「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と答えます。親の葬儀は大切です。しかし、それ以上に大切な事柄がある。これは少し無慈悲にも聞こえますが、人間的な価値観だけで見ていると、最も大切な事柄を見失い場合がある。イエス様はそう語っているのです。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」と答えた人の場合も、同じであったと思います。

最後に召命に関する人は、本日の使徒書の著者パウロです。パウロは、律法を実践し、自分が模範となるという意味での、イスラエルへの召命をしっかりと自覚していた人でした。しかし、パウロは、復活のイエス様に出会い、新しい召命を受けました。それは一言でいえば、信仰ということになりますが、単に信仰か行いかという二者択一的な意味ではありません。『聖書』の中の信仰は、単に心の問題ではなく、心身ともに忠誠を尽くすことです。イエス様に従

うことを通して、主なる神様に忠誠を尽くすという、新しい召命を受けたのでした。

本日の使徒書、ガラテヤ書には、「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはなりません」（ガラ 5：1）とある通り、その召命が、自由とかかかわっていることが示されます。ここでパウロが用いている自由の意味は、イエス様を信じることを通して、主なる神様が、その信じる人に、様々な人間的考えや思い、あるいは思い煩い、また人間関係から、解き放ってくださったということです。それゆえに、なんでも行っていいという自由ではなく、「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」（ガラ 5：13）とある通りに、「互いに愛し合うために」の自由です。

しかし、パウロは、愛の行いとはこれですと定義することはしません。それは律法のような束縛を生み出してしまうからです。それゆえパウロは、肉と霊という二元論的な分け方をして、肉から出る業ではなく、霊から出る業を実行してほしいと述べます。そして肉から出る行為、霊から出る行為の一覧表を示すのですが、これらの一覧から、自らの意志で、それぞれの歩むべき事柄を見出してほしいと求めているのです。召命と関連させるならば、それぞれに与えられる召命を見出してほしいということです。

使徒書にある一覧は、それぞれ細かく見ると面白い点もあります。しかし、それは、ユダヤ教的な善悪でも、キリスト教的な善悪ではなく、パウロの時代の常識的な善悪の判断でした。そのよい方を選びなさいということです。パウロは、具体的にそれぞれが何をすべきは定めません。しかし、「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう」と述べ、霊によってわたしたちが前向きに歩めると結論付けているのです。パウロのその言葉は、主なる神様が何をいま私たちに求めておられるか、それを明確に把握して歩むならば、人間的な思いでは、不確定な部分があっても、かならず主なる神様の霊の導きがある、そう私たちに告げていると思います。

本日の三つの聖書箇所から、いろいろな召命の在り方が示されました。そして、すべての教会は、その名称の語源的意味の通り、主なる神様に呼ばれた人の集まりです。つまり召命を受けた人たちの集まりです。コロナ禍のため、活動はまだ制限されていますが、一人ひとりが主なる神様に求められている事柄を、自分が求める目的のためではなく、「互いに愛し合うために」、そして世界の平和に向けて、たくさん実践できる教会でありたいと思います。本日の特禱でわたしたちは「み心に従って良い行いの実を結ぶことができるようにしてください」と祈りました。この世界に主のみ心にかなう実が、たくさん結ばれることを願いつつ、わたしたちの歩みを続けたいと思います。